

## 故岡村正人先生を偲んで

正 木 久 司

(大学商学部教授)

岡村正人先生について語るとすれば、まず  
学究の人ということになる。日本経営学界で  
は「株金の岡村」ということで有名であった。  
つまり、先生の名著『株式会社金融の研究』  
をもじつての呼び方であった。先生には、処  
女作の『株式金融論』（昭和十四年）以来、生  
涯十七冊の著書が数えられるが、集大成され  
た『株式会社金融の研究』（昭和二十五年、改  
訂、全訂そして新版が出る）の一冊に尽える  
といつて過言でない。

同書が、わが国における株式会社研究、財  
務論研究においてどうしても避けて通ること  
ができない貴重な書物、今や古典的文獻であ  
ることは言うまでもない。どうしてそのよう  
に言えるのか、ここで少し述べてみることに  
しよう。わが国の株式会社研究は、橋学派の  
上田貞次郎教授、そしてその弟子の増地庸治  
郎教授をもつて嚆矢とする。泰斗上田教授は、  
大正期に株式会社の経済の本質を証券制度で  
あると初めて明快に規定して世人の注目を集  
めた。ところが、弟子の増地教授（日本の経  
営学の創設者）は、昭和初期に師の上田説を  
正統に継承せず、株式会社の経営、経済の本質  
として企業形態論的な把握をした。つまり、

証券制度論ではなかった。いわば株式会社本  
質論がちがった方向に進み始めたのである。  
一橋学派ではこの増地説のために、株式会社  
研究は一頓座をきたした。日本の株式会社論  
は上田説に回帰させ、さらに発展させたのが  
実は同志社の岡村先生であった。岡村先生に  
よつて日本の株式会社研究が立ち直つたと言  
えよう。

先生の講義で、今でも忘れられないのだが、  
「株式会社の本質的特徴は資本の証券化によ  
る資本集中、つまり証券金融である」という  
言葉が繰り返された。増地教授により違つた  
規定を受けた株式会社の本質論が、岡村先生  
のこの言葉による軌道修正で正しい位置を占  
めたと私は思う。上田説の証券制度論が岡村  
先生によつて証券金融論として正統に受け継  
がれ発展させられたと言える。学生の頃はよ  
くわからなかつたこの言葉の意味も、後にな  
つてなるほどと理解できるようになった。

『株式会社金融の研究』が経営学界に投げか  
けた波紋は大きかつた。同書は単に株式会社  
の本質規定の問題、だけにとどまらず、それか  
ら派生する株式と社債をめぐる財務問題、さ  
らに株式会社支配の問題で、後進の多くの経



●岡村正人氏略歴●

- 1908年11月30日 福岡県筑紫郡春日村（現在・春日市）に生まれる
- 1933年3月 同志社大学法学部経済学科卒業
- 1944年4月 同志社大学法学部教授
- 1949年4月 同志社大学商学部教授
- 1955年4月～1957年8月  
同志社大学人文科学研究所長
- 1955年6月～1963年8月  
学校法人同志社理事
- 1964年4月～1968年3月  
同志社大学商学部長
- 1979年3月 定年退職
- 1979年4月 同志社大学名誉教授の称号を受く
- 1993年4月1日 12時50分 永眠 84歳

営学徒に良き示唆を与えてきた。私など自分の研究や講義で、先生の遺産の恩恵を一番多く受けてきている。学究を目指す私にとつて、先生の死は正に巨星墜つたの感が深い。

先生は、以上の研究業績のほかに、早くからその能力を買われて同志社大学研究所長（現人文科学研究所長）、学校法人同志社理事、そして同志社大学商学部長の要職についてこられた。それぞれの執務状況は研究面での態度と同様にきわめて堅実であったと伺っている。また教育面でも、先生の真摯な態度に学生が好感をもち、先生の「経営学演習」に集まる学生数はひときわ群を抜いていた。岡村演習は当時「有名ゼミ」であり、競争激甚で定員枠に入ることは容易でなかった。岡村演習の卒業生の会を「正志会」と言っているが、昭和二十六年三月の第一回卒業生から昭和五十四年三月の第二十九回卒業生まで、人数は九六二人（特別会員十五人がプラスされる）の多くを擁している。卒業生は慈父のごとき先生を慕い、先生もまたよく学生の面倒を見てこられた。二年に一回の「正志会」の集いには多くの会員が出席し、先生の警咳に接してきた。平成三年の正志会総会まで先生の元気

な姿を見ることができたが、今年の四月一日に逝去されて四月十一日の正志会は主なき総会となった。誠に寂寥にたえない思いである。

先生は学生に暖かい配慮を惜しまれなかったが、それには早くに一人息子を亡くされた悲しい思いが、学生への愛情へと取って代ったと言われる。息子さんの葬式のととき、涙される先生を見て私ももらい泣きした。晩年に奥様に先立たれた先生は、よく淋しさを吐露されていたが、私に「夫婦仲良くしろよ」と度々おっしゃった。

このように先生の人間味ある一面は長いお付き合いのなかで看取できたが、私にとつては学究として生きる上で先生はやはり厳しい人であった。ふだんの会話でも慎重な発言を要求されたし、たえず自己研鑽を望まれた。

著書「株式会社金融の研究」はむつかしい内容を平易に説いた点で定評があったが、先生はできるだけわかりやすい表現を好まれた。「自己に厳しく平易な表現を心がける」、これが先生のモットーでもあった。先生は日本酒を好まれ、酒が入ると談論風発となるが、おむね話は学問的なものが多かった。正に先生は学究の人と言えた。

先生が『株式会社金融の研究』を昭和二十五年に上梓されてから四十余年が経過した。その間に、株式会社本質論も変わり、そして株式会社金融の研究も大きく変わりつつある。いわゆる財務論の研究、そして先生の得意とされた会社支配論も様相を異にしつつある。これらの問題を新たにどのように理解し展開すべき



新島襄遺墨影本の掛軸を頒布

同志社の創立者新島襄の書簡・色紙などの遺墨に接する機会は少なく、せめて複製された色紙でも欲しいとのご要望に応じて、影本を、四点作成頒布しています。

この影本は、新島襄が元治元年、函館からの脱国に成功した後、航海日記に書きとめられた漢詩および明治二二年秋から二三年春にかけて、その心情を吐露された詩歌の遺墨の中から選んだもので、同志社関係

か、先生から後事を託されているが、私にとつて前途遠遠の感がある。新たな株式会社論をどのように発展させるか、これは先生から与えられた宿題である。先生を偲んでの一文をしたためながら、この思いを新たにしている。それにしてもわれわれ学徒にとつて言えることは、『株式会社金融の研究』が株式会社研究や

者のみでなく、一般社会にも強く訴えるものがあると思います。

◎掛軸（影本）

(H) 一幅 一三、五〇〇円

(I) (J) 一幅 八、五〇〇円

(H) 「男児決志馳千里 自嘗苦辛豈思家

却笑春風吹雨夜 枕頭尚夢故園花」

慶応元年三月ワイルド・ローヴァ

1号船上で作られた詩を明治一六

年正月改めて浄書された。

(I) 「不止月下併能越 跋涉八州是我分

壯図却促男児涙 滴々灑為縷々文」

明治二二年一二月新潟伝道に従事して

いた卒業生広津友信におくられた詩。

財務論研究にとつて、依然貴重な、生命ある存在であることである。また、同書をめぐって、同志社大学の学生に対し、現在も誇りと自信をもって講義できることをありがたく思っている。先生は、私どもに良き財産を遺してくださいました。ありがとうございます。どうか安らかに眠りください。

(J) 「いしかねも透れかして一筋に

射る矢にこむる大丈夫の意地」

明治二三年一月五日「送歳の詩」と同

様大磯百足屋で詠まれた和歌。

◎ 購入ご希望の方は左記へ直接電話または文書でお申し込みください。

◎ 代金および送料は現品送付の際、振込

用紙を同封しますから後日ご送金くださ

い。

◎ 製作日数の関係で、納品が一月程度

遅れる場合があります。

取扱い・同志社収益事業課

京都市上京区今出川通烏丸東入

電話(〇七五)一二五一―一三〇三七・八

## 故加藤テイ先生を偲んで

### 有賀のゆり

(女子大学教授)

私たちの敬愛してやまない加藤テイ先生が、去る六月十四日(月)午前七時十六分、遂に天に召された。百歳と三ヶ月であった。

昨年五月には先生の白寿を祝って、女子大音楽学科の卒業生を中心とする教え子、関係者が約八十名集まり、先生ご所望の中華料理を囲んで楽しい時を持った。また六月と九月には愛弟子の声楽の方々によるお祝と感謝の演奏会があり、先生は熱心にご指導され、とてもお喜びだった。しかし暮頃から次第に体力を失われ、本年三月二日、百歳のお誕生日は最早、教え子たちでお祝いすることができなかつた。あの温顔、そして説得力のあるよく透るお声は、今なお私たちの心に生きている。かつて同志社には何人かの加藤先生がおられたので、私たちは「テイ先生」と親しみをこめてお呼びしていた。テイ先生はあの時代の日本女性には珍らしい屈託のなき、包容力と底力を持った方だった。先生の生い立ちを探ると、それはなる程とうなずかれる。

テイ先生は元の姓を清水といわれ、幼少の頃より、母方のお祖父様に引取られ、目に入れても痛くない程可愛がられて成長された。所は青森県南津軽郡藤崎村。祖父の清水理兵

衛氏(天保八生)は藤崎村の初代村長であり、一八八五(明治一八)年に本多庸一先生から洗礼をうけたクリスチャンであった。人徳高く、私財を献げて村の小学校や教会創立に力をつくされた。そして次男(テイ)の母の兄、明治元生)瀧次郎が弘前市の東奥義塾を卒業すると、はるばる京都・同志社の新島襄先生のもとに送ることにしたのである。

それは一八八五(明治一八)年、父と共に洗礼をうけた清水瀧次郎氏十八歳の時であった。未だ鉄道とてなく、ただ新島先生を慕う思いで四百里の道を徒歩で四十日かけて京都に着いたとの事である。二年間新島先生の下で学んだが(学友に土倉龍次郎氏)、先生のすすめにより、先生の添書をもってアメリカに留学した。その三年後に新島先生は永眠され、その打撃は大きかった。しかし瀧次郎青年は通算十二年間アメリカに留まって地質学を習得、帰国後は鉱山発掘に従事し、その後台湾に水力電気会社を創始する。

さてテイ先生が弘前のミッシヨンの小学校を卒業した頃、瀧次郎伯父は台湾から戻り、東京・小石川に一家を構えておられた。そこでテイ先生は東京に出て、このお宅から本多



### ●加藤テイ氏略歴●

- 1893年3月2日 生まれ  
1917年3月 東京音楽学校（現東京芸大）卒業  
1951年7月 同志社女子大学教授  
1955年12月 教科用図書検定調査審議会調査員を依嘱  
1956年4月 同志社女子大学音楽専攻科主任  
1958年3月 定年退職  
1974年9月 毎日新聞 NHK 主催日本音楽コンクール顧問  
1927年 音楽をオルガ・カラスロヴァ女史に師事  
ピアノをコンパニオン氏に師事  
1928年より 関西音楽団体に於て130回以上出演  
1930年より 宗教音楽研究に従事、研究発表  
1982年 京教音楽家クラブより表彰  
1993年6月14日 午前7時16分没 享年100歳3ヶ月

庸一先生が学院長の青山女学院に通学することになった。ところが毎日夕飯が終ると十二歳位のテイ先生を前に、伯父様の新島先生崇拜論が始まる。具体的な内容は忘れてしまっただが、その話を聞く中に、京都と同志社への憧れに似たものが自分の心に宿ったように思う、とテイ先生は晩年よく述べられた。しかし後年、その同志社と京都で長い人生のほとんどを過し生涯を全うすることになろうとは、その時、夢にも思われなかったことであつた。

青山への通学は遠く、病で倒れたテイ先生は、途中で東京府女子師範学校に転校して卒業された。そのあと音楽学校に進学されるのであるが、その要因はやはり伯父様宅が源だつた。二軒おいて隣りに幸田邸があり、露伴のきょうだいで洋行婦りのピアノリスト幸田延、バイオリニスト安藤幸の両女史がおられ、心地よい音楽が聞えてきたこと、そして家では伯父様が熱心なクリスチャンでよく讚美歌を歌い、自熱に音楽が好きになったとのことである。

念願の東京音楽学校（現東京芸大）を一七（大正六）年卒業、翌年奈良県女子師範

学校教諭となられた。

この頃、奈良の素封家で音楽愛好家の邸宅でしばしばサロンコンサートが開かれ、妙齡のテイ先生はここで、夫となるべき加藤勝意氏と運命の出合いをされたようである。加藤勝意氏は一八九五（明治二八）年に高知に生まれ、祖母の代からの土佐教会の熱心な信者であつた。同志社大学では経済を専攻したが（大正七年卒）、大の音楽好きでプリムローズで歌い、バイオリンも弾き、同志社マンドリンクラブの創設（大正九）にかかわつた六名の一人である。その上、ハンサムで、いかにも同志社ボーイらしく、あんな善い人はいなかつた。とテイ先生は繰り返し語っておられたそうである。結婚は一九二〇（大正九）年八月、勝意氏二十五歳、テイ先生二十七歳であつた。

ところで高知の土佐教会は、横浜のジェームズ・バラ塾で本多庸一と殆んど時を同じくして学んだ杉浦義一青年（一八八七〜一八九三）が、入信後、同志社の英学校および神学校で学び、牧師として高知に招かれて創立した教会である。その創立にあたっては、杉浦牧師は新島先生の指導を仰いでいる。すなわ

ち横浜で播かれた信仰の種が、一方では本多庸一を通して東北へ、他方では杉浦義一を通して西へと拡がった。そうしてふしぎな神のみ手が、北国のテイ先生と、西の南国の加藤勝意を結び合わせたのである。しかもその両者の背後に新島先生の影響が働いていた。

結婚されたテイ先生は、銀行員の夫勝意氏に従って千葉を皮切りに転々とされるが、転勤の先々で女学校の音楽の先生を続けられた。その間、千葉で長女道子さん、次女博子さんが誕生、関西に戻って京都府立第二高女の教諭時代に三女雅子さん（現石村雅子女子大名誉教授）が誕生された。三人の子宝に恵まれた喜びも束の間、一年と三ヶ月で、大阪在住中、最愛の夫君勝意氏と死別される。一九二七（昭和二）年六月十八日、テイ先生は三十四歳の若さであった。

この悲しい出来事を転機として、テイ先生は本気で勉強を始められたようである。早速九月から、既に囑託で教えていた大阪府立夕陽丘高女の教諭となり、同時に神戸に住むカラスロヴァ女史（白系

ロシア人）に声楽を、コンパニオン氏にピアノを師事して、音楽を基礎からやり直すつもりで果敢に勉強された。丁度その頃、大阪にBK放送局（現NHK大阪）が開設され、カラスロヴァ先生らの推薦で、貴重なアルト歌手として活躍が始まる。折も折、同志社の女子部で柳兼子先生（宗悦夫人）に続いて音楽を教えていた竹内禎先生（栖鳳画伯の長男の夫人）から、フランス留学のため後任として来てくれないか、との誘いがかかった。一九二九（昭和四）年、松田道校長の時であった。そして、厳しいクラップ先生の試験にも合格、その四月から同志社女子専門学校の教員となられたのである。以来三十四年間、先生は同志社の女子部で教え続けて下さった。

私が最初に先生の存在を意識したのは小学校の低学年の一九三五（昭和一〇）年頃のこと。私がピアノを習っていた篤瀨百合子先生（卯子、紹子女子大教授の母堂）と、テイ先生の門下生との合同の発表会が日仏学館であった。今から考えるとその頃お二人は共に、女子部の課外音楽でレッスンをしておられたのである。高女部（現女子中）に入学すると二年目に音楽の授業がテイ先生になり嬉しかった。

た。すでに太平洋戦争に突入しており、世は軍国調であったが、先生は少しも意に介さない顔で、音楽的にすぐれた歌曲・合唱曲を沢山教えて下さった。ちなみに戦時中は同志社のキャンパスも荒蕪とした雰囲気になっていたのを憂い、当時大学の神学科主任で自称名テナーの私の父有賀鐵太郎が、森下芳雄先生のご指導を仰いで学内の音楽愛好家に声をかけ、デントン・ハウスで毎週合唱する集いをもった。お互いに励まし合い、また敵国人として軟禁下のデントン先生をお慰めするのが目的であった。この会を称して「玉石会」。私の父などは「石」で、勿論「玉」はテイ先生だった。

戦後、同志社の音楽熱は解放感とともに再び高まり、私は女専の聖歌隊の一員として、活力溢れる先生のご指導をうけることができた。友人の声楽のレッスンの伴奏者として自宅に伺い、私までレッスンをしていただけ、あげくの果ては夕食までご馳走になって話し込んでいたことも度々だった。テイ先生は再開された「メサイヤ」をはじめ、諸種のオラトリオ、宗教曲のアルト独唱者として大活躍で、私はただ憧れをもってその円熟した歌唱

を拜聴していた。

一九四九（昭和二四）年四月、女子大学への移行と同時に、女子部の課外音楽を母胎として音楽専攻（現音楽学科）が発足したが、テイ先生は片桐哲学長、F・B・クラップ教授、中瀬古和教授らと共に、草創期の労苦を担われた。私は幸いにも一九五四（昭和二九）年の秋より音楽学科の教員に加えていただき、音楽研究発表会には何回かテイ先生の伴奏もさせていただくことができた。

テイ先生はどんな困難にも屈せず希望をもつて生きること、教え子の一人一人を人格として心から愛し絶えず励ますこと、そして自ら命のある限り努力し謙虚に学び続けることを、その長いご生涯を通して示して下さいました。これこそ、新島先生が同志社の教師に願っておられたことではないだろうか。

テイ先生の告別式は六月二十七日（日）の午後、同志社教会佐伯幸雄牧師の司式によりなつかしの栄光館で、花と音楽に色どられて執り行なわれ、学内外の先生を慕う人々がその広い会場を埋めた。天

に帰られたテイ先生のみ霊に永遠の平安を祈り、神を讚美しつつ筆をおく。

本稿執筆にあたっては、「しばくさ」同志社創立百周年記念・学報第十四号（同志社女子大学）中の「座談会・同志社よもやま話―草創期の先生がたを囲んで―」を参考にし、他、令嬢石村雅子先生（女子大学名誉教授）より多くの資料を含め、懇切なご教示をいただいたことを感謝している。

